

(32b) コウシュンシバ群落

〔シバ草原〕

母島列島向島の海食崖や聳島にはコウシュンシバの純群落ないしこれにムニンテンツキ、ソナレシバなどがわずかに混生したシバ草原がみとめられた。これらがコウシュンシバ群落として識別されたものである。なお、向島のコウシュンシバ群落は、その広がりきわめて小さいため、植生図には表われない。

33 ホナガソウ群落

〔常緑半低木林〕

ホナガソウが優占した、高さ0.3～1.2 mの群落。ホナガソウは本来半低木であるが、植物体は草本状の部分が大半を占め、これが優占したこの群落は一見草本群落の印象を与える。一般に純群落を作るが、急斜面など土壌層がうすくなっている所では、セイロンベンケイを混じえる。

ホナガソウ群落は、やゝ内陸の路傍とか基岩が半ば露出したような立地に成立している。大場・菅原(1977)は、これを路傍雑草群落として報告しているが、父島南部の中山峠付近では、山腹斜面上部一帯を被っているのが見られる。そのほか、この群落は、父島の旭山、南袋沢などでも広い面積を占めている。一方母島では大きな広がりはない。

なお、このホナガソウ群落と混生することもある、移入植物のセイロンベンケイは、父島や母島の内陸部の乾燥した絶壁または断崖の岩棚や岩隙で優占してセイロンベンケイ群落をつくっている。父島の旭山、つつじ山、母島の剣先山などに多いが、急斜面にあるため植生図には表われない。

34 空地・埋立地植物群落

父島の大村の空地、奥村の海岸埋立地、洲崎の元軍用飛行場の跡地、母島の造成地などには、汎熱帯分布のものか帰化植物を中核とした雑草群落ないしそれに類似した植物群落が形成されている。その主なものとしては、セイバンモロコシ群落、オオバナセンダングサ群落、クロコウセンガヤ

ーコウセンガヤ群落、ギョウギシバ群落、オヒシバ群集、ヒメギンネム群落などがあげられる。

(34a) セイバンモロコシ群落

〔中型禾本草原〕

セイバンモロコシ一種から成る、高さ80 cm～1 mの中型の禾本草原。父島大村の空地あるいは路傍にみられる。

(34b) オオバナセンダングサ群落

〔中茎雑草群落〕

群落高70 cmほどの雑草群落で、オオバナセンダングサが優占し、クリノイガ、クロコウセンガヤ、オオアレチノギクなどが混生する。父島の大村をはじめとした集落周辺の空地で優勢である。

(34c) クロコウセンガヤーコウセンガヤ群落

〔中茎雑草群落〕

小笠原諸島の埋立地、空地、路傍などに最も広く分布するのが、クロコウセンガヤとコウセンガヤの優占したこの雑草群落である。高さは80 cm内外で、下層にはクリノイガ、タツノツメガヤなどが混生することもある。父島、兄島、母島の空地や路傍で見られた。

(34d) ギョウギシバ群落

〔シバ草地〕

高さ10～20 cmほどのギョウギシバ優占の群落。路上、路傍などで、少し踏圧を受ける立地に成立するとともに、海岸砂浜や海岸崖地の肩の部分にも見出される。

(34e) オヒシバ群集 (Pignatti 1953)

〔低茎雑草群落〕

空地、路傍などの雑草群落。普通純群落をつくるが、スズメノヒエ、コウセンガヤ、ギョウギンバが混生することもある。

(34f) ヒメギンネム群落

〔落葉低木林〕

ヒメギンネムが優占する高さ0.5～2 mの低木林。半つる性のヒメギンネムが密生して純群落をつくることが多く、ときにはギンネム群落(凡例29)のマント群落として成立していることもある。海岸の埋立地や空地に多い。父島、母島に分布する。

35 耕作畑雑草群落

小笠原諸島では、現在耕作されている畑は母島に集中し、父島ではその地形にも影響されて比較的少ない。作付けはバナナ、パイナップル、柑橘類などの果樹類とアレカヤシ、クロトン、カラジュームなどの観賞植物を主とし、その他メロン、スイカ、トマトなどの野菜類も栽培されている。一方稲作はない。

これらの耕作畑には、オガサワラミカンソウ、ハイニシキソウ、スズメノヒエ、カタバミ、ムラサキカタバミ、オニタビラコ、アカバナリハコベなどによって耕作畑雑草群落が形成されている。父島の小曲、北袋沢、母島の船見台、評議平などに見られる。

III その他

36 集 落

小笠原諸島における現在の集落は、父島の大村、清瀬、奥村、母島の沖村、北村だけであり、その他の島々はいずれも無人島である。これらの集落の人家には、庭木としてムニンデイコ、ココヤシ、ハイビスカス、ポインセチア、インドソケイ、シマサルスベリなどが植えられ、生垣としてはガジュマル、ハイビスカス、オオシマコパンノキ、ブーゲンビリアなどが利用されている。また街路樹としてはココヤシが最も多く、そのほかアレ

カヤシ、ハスノハギリ、モモタマナ、テリハボクなどもある。

37 造成地

岩石採掘場、無植生の埋立地、集落付近の踏圧の強い所、波止場などの人工裸地とかコンクリート地を含む。

38 自然裸地

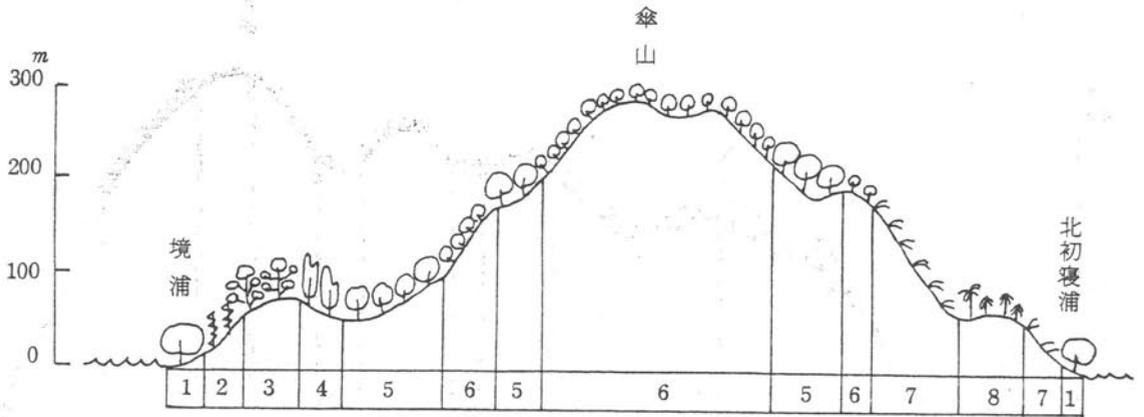
小笠原諸島の島々は、海岸のいたるところに海食による断崖があり、そこは基岩が露出していたり、崩壊地となっている。また所によっては小規模ながら砂浜も形成されている。これらのような立地には植生が発達しにくく、いわゆる自然裸地となっていて、小笠原でのその広がり著しく大きい。父島の南海岸と東海岸、兄島の北東海岸、弟島の全海岸、母島の東崎湾と大崩湾沿い、東台の海岸一帯、姉島、妹島、姪島の海岸一帯などがその主なものである。なお、植生図に示された自然裸地の中にも、断片的に植生が発達しているところも海上よりの望見によってみとめられたが、アプローチがきわめて困難なために群落を確認できなかった所もあり、そのような所は一応自然裸地としておいた。今後の調査により群落とその広がりを精確に把握する必要がある。

39 開放水域

父島の時雨ダムなどのダム湖や父島属島南島の陰陽池がこの凡例に入る。

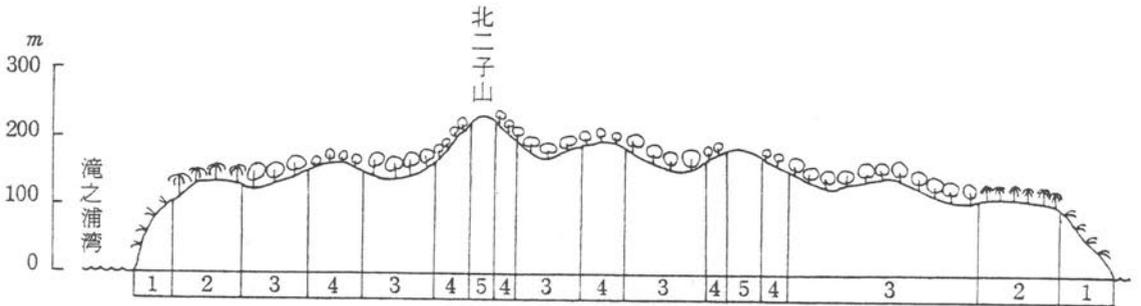
植生配分模式図

小笠原諸島のうちの主要島である父島列島の父島、兄島と母島列島の母島の3島における植生配分模式図を示せば図1-3のようになる。



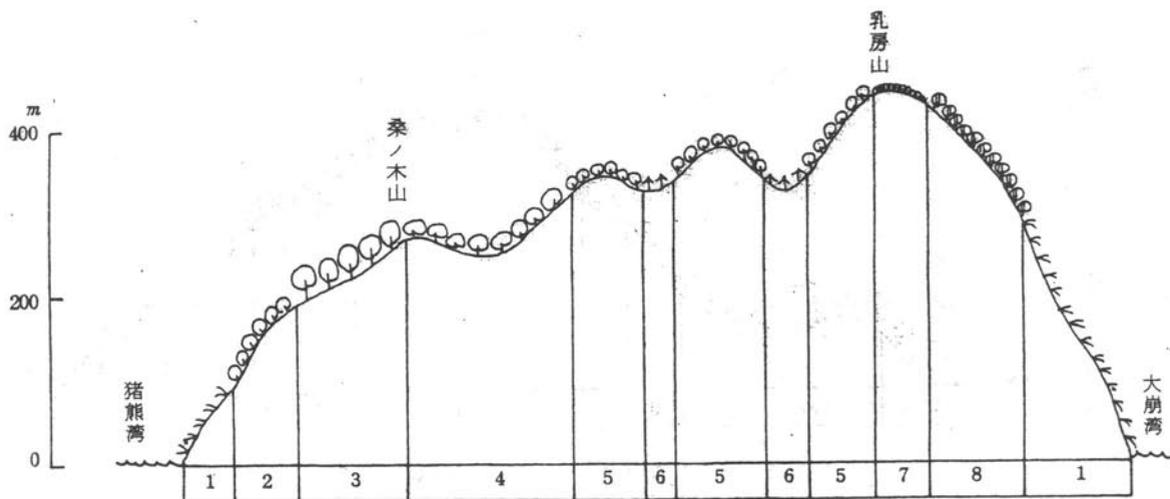
- 1 ハスノハギリーモモタマナ群集
- 2 ギンネム群落
- 3 リュウキュウマツ林
- 4 モクマオウ林
- 5 ムニンヒメツバキーコブガシ群集
- 6 コバノアカテツシマイスノキ群集
- 7 オガサワラススキ群集
- 8 オガサワラビロウータコノキ群集

図1 父島植生配分模式図



- 1 オガサワラススキ群集
- 2 オガサワラビロウータコノキ群集
- 3 ムニンヒメツバキーコブガシ群集
- 4 コバノアカテツシマイスノキ群集
- 5 荒原植物群落

図2 兄島植生配分模式図



- 1 オガサワラススキ群集
- 2 コバノアカテツームニンアオガンビ群集
- 3 シマホルトノキーウドノキ群集
- 4 ムニンヒメツパキーシマオオタニワタリ群集
- 5 モクタチバナナーセキモンノキ群集
- 6 マルハチ群集
- 7 ツルダコ群落
- 8 ワダンノキ群集

図3 母島植生配分模式図

5 資料リスト

番号	筆者名(発行者名)	発行年	資料名
1	木村 允	1978	小笠原のギンネム：小笠原研究年報2
2	小林 純子	1978	小笠原諸島の陸上維管束植物：小笠原研究Nos. 1, 2
3	国立公園協会	1977	小笠原・母島道路計画にともなう自然環境調査報告書
4	文部省・文化庁	1970	小笠原諸島の学術・天然記念物調査報告書
5	東京営林局	1975	小笠原国営林の植生と学術参考保護林
6	東京府小笠原島庁	1914	小笠原島ノ概況及森林
7	豊島 恕清	1938	小笠原島の植生並熱帯有用植物に就て：林業試験報告第37号
8	津山尚・浅海重夫(編)	1970	小笠原の自然

6 調査担当者名簿

番号	氏名	所属	分担分野
1	奥 富 清	東京農工大学農学部	総括責任者
2	井 関 智 裕	同上	植生区分
3	日 置 佳 之	同上	植生図化
4	梶 原 洋 一	同上	現地調査協力
5	大 野 啓 一	同上	同上
6	北 山 兼 弘	同上	同上
7	坂 本 圭 児	同上	同上
8	中 村 徹	筑波大学農林学系	同上